

作成年月日	平成29年7月10日
作成部局	教育委員会事務局社会教育課

Fear in Painting 怖い絵展



ポール・ドラローシュ《レディ・ジェーン・グレイの処刑》1833年 油彩・カンヴァス ロンドン・ナショナル・ギャラリー

Paul Delaroche, The Execution of Lady Jane Grey, © The National Gallery, London. Bequeathed by the Second Lord Cheylesmore, 1902

〇みどころ

① 「恐怖」というテーマ性をもったこれまでにない切り口の展覧会！

- 視覚的な怖さだけでなく、隠された背景を知ることによって判明する恐怖まで、「恐怖」をテーマに約80点の西洋絵画・版画を展示。
- 「この絵はなぜ怖い？」その怖さを読み解くヒントとともに絵画を鑑賞！
- ターナー、モロー、セザンヌなど、ヨーロッパ近代絵画の巨匠による“怖い”作品もセレクト！

② ロンドン・ナショナル・ギャラリーの至宝《レディ・ジェーン・グレイの処刑》が奇跡の初来日！

- 本展最大の注目作は、縦2.5m、幅3mにもおよぶ、ポール・ドラローシュの大作《レディ・ジェーン・グレイの処刑》。ジェーン・グレイは、イングランド史上初の女王となるも、わずか9日後に廃位され、その7ヶ月後、16歳で散った悲劇の人物。その最期を繊細な筆致と緻密な構成で描いた本作は、まさに圧巻の一言。
- 1928年のテムズ川の大洪水により失われたと考えられていたが、1973年の調査で奇跡的に発見される。1975年の一般公開再開以来、瞬く間にナショナル・ギャラリーの代表作品となった奇跡の作品が初来日。

③ ベストセラー『怖い絵』シリーズ著者・中野京子氏特別監修！

- 展覧会のために新たに選び抜いた“怖い絵”が続々登場！
- ポール・ドラローシュの《レディ・ジェーン・グレイの処刑》のほか、ハーバート・ジェイムズ・ドレイパーの《オデュッセウスとセイレーン》や、ウィリアム・ホガースの『ビール街とジン横丁』より《ジン横丁》など、『怖い絵』シリーズで紹介された作品も展示。

○開催趣旨

「怖さは想像の友です。想像によって恐怖は生まれ、恐怖によって想像は羽ばたく。」(中野京子)

ドイツ文学者・中野京子氏が2007年に上梓した『怖い絵』は、「恐怖」をキーワードに西洋美術史に登場する様々な名画の魅力を読み解く好著として大きな反響を呼びました。これは、絵画が内包する情報をスリングに掘り起こす氏の手腕もさることながら、「恐怖」という忌むべき感情に対して我々が抱く抗いがたい好奇心を強く刺激したからに他なりません。

同書の第1巻が刊行されてから10周年を記念して開催する本展は、中野氏がシリーズで取り上げた作品を筆頭に、近世から近代にかけてのヨーロッパ各国で描かれた「恐怖」を主題とする膨大な絵画の中から油彩画と版画の傑作を選び出し、神話、怪物、異界、現実、風景、歴史といったテーマに分けて展示します。視覚的に直接怖さが伝わるものから、歴史的背景やシチュエーションを知ることによって初めて怖さが発生するものまで、普段私たちが美術に求める「美」にも匹敵する「恐怖」の魅惑を網羅的に紹介します。

○開催情報

- ・ 会 期 2017年7月22日(土)～9月18日(月・祝)
 - ・ 開館時間 午前10時-午後6時 (金・土曜日は夜間開館、午後8時まで)
入場は閉館の30分前まで
 - ・ 休 館 日 月曜日 (ただし、9月18日(月・祝)は開館)
 - ・ 主 催 兵庫県立美術館、産経新聞社、関西テレビ放送、神戸新聞社
 - ・ 後 援 公益財団法人 伊藤文化財団、兵庫県、兵庫県教育委員会、神戸市、神戸市教育委員会、ラジオ大阪、サンケイリビング新聞社、サンケイスポーツ、夕刊フジ、サンテレビジョン、ラジオ関西
 - ・ 協 賛 日本写真印刷、TKG Foundation of Arts & Culture
 - ・ 協 力 日本航空、KADOKAWA、NHK出版
 - ・ 企画協力 アルティス、Art Sanjo、FCI
平成29年度 文化庁 文化芸術創造活用プラット・フォーム形成事業
 - ・ 観覧料金 一般1,400 (1,200) 円、大学生1,000 (800) 円、70歳以上700 (600) 円、
高校生以下無料
※ () 内は前売料金 (一般・大学生のみ) および20名以上の団体割引料金
※障がいのある方は各当日料金の半額 (70歳以上を除く)、その介護の方1名は無料
- (主なチケット販売場所)
チケットぴあ (Pコード: 768 - 292)、ローソンチケット (Lコード: 52807)、
セブンイレブン、イープラス、CNプレイガイドほか京阪神のプレイガイド
- 「怖い絵」展公式ホームページ <http://www.kowaie.com>

○展示構成

1. 神話と聖書

ギリシャ・ローマ神話や聖書で語られる物語は、必ずしも幸福なものばかりではなく、人間に苦難を強いたり、悲劇的な結末を迎えるものも少なくない。というのも、神話や宗教は、本質的に人間には抗うことのできない超越的な力や摂理を抽出するものだからである。本章では、神の意志や気まぐれに翻弄される人間の悲喜劇を描いた絵画を紹介する。

《オデュッセウスに杯を差し出すキルケー》

キルケーは、古代ギリシャの叙事詩『オデュッセイア』の登場人物で、男たちを魔術で動物に変えてしまう恐るべき魔女。ヴィクトリア朝の画家ウォーターハウスが描いた本作では、薄衣をまとって玉座に座り、右手の杯を高々と掲げる傲慢な姿で描かれている。挑発的に反らせた顎と上気した紅い頬に、彼女の慢心と興奮を見てとることができる。玉座の背後に置かれた楕円形の大鏡の片隅に映るのは英雄オデュッセウス。オデュッセウスが杯を飲み干すや、キルケーが左手に持つ魔法の杖が頭上に振り下ろされるにちがいない。周囲に転がる豚は、一足先に犠牲となった憐れな部下たちである。



ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス《オデュッセウスに杯を差し出すキルケー》

1891年 油彩・カンヴァス オールダム美術館©Image courtesy of Gallery Oldham

2. 悪魔、地獄、怪物

ヨーロッパのキリスト教世界では、人間を墮落させ悪の道へと誘う者として悪魔という存在が長きに亘って想像されてきた。また、人間が生前犯した罪の報いを受ける死後の世界として、地獄のイメージが伝統的に培われてきた。本章では、近代にまで命脈を保った悪魔や地獄のイメージや、それに近接する怪物の主題を描いた作品を取り上げる。

《夢魔》

《夢魔》は、フューズリのもっとも独創的な傑作。いくつかのヴァリエーションが確認されており、本作は、もっとも有名なオリジナル作品を縦長の小型キャンヴァスに移したミニチュア版。画面には、寝台に仰向けに眠る乙女、その腹の上でうづくまる小鬼、カーテンの隙間から顔を覗かせる馬が描かれる。上半身をのけぞらせ、ほとんどベッドからずり落ちそうな女の身振りや表情は、苦悶とも恍惚ともとれる。夢魔は伝統的に就寝中の女性を犯す悪魔とされる。しばしば情欲の象徴とされる馬のモチーフと相まって、この絵にエロティックな含意が込められていることは疑いない。闇のなか爛々と輝く夢魔の瞳は、禁忌の場面を覗き見る我々を威嚇するかのようだ。



ヘンリー・フューズリ《夢魔》1800-10年頃 油彩・カンヴァス ヴァッサー大学、フランシス・リーマン・ロブ・アート・センター蔵

© Frances Lehman Loeb Art Center, Vassar College, Poughkeepsie, New York, Purchase, 1966.1

3. 異界と幻視

人は、自らの日常生活の外にそれとは違う論理に支配された異界というべき空間を想像してきた。とりわけロマン主義以降の美術では、異界が時として日常生活の狭間や我々自身の内面に発生する様子を幻視するかのような作品が数多く生み出された。本章では、我々の住む世界の自明性を脅かすさまざまな異界の表現を紹介する。

《そして妖精たちは服を持って逃げた》

草の上で日向ぼっこしている母親と赤ん坊。爽やかな光に満ちた平和な情景だが、よく見ると小さな妖精の姿が見える。本作は、19世紀末の妖精画ブームの流れに沿って描かれた作品だが、キャラクター化された同時代の妖精とは一味違い、印象派風の素早いタッチやスナップショット的な構図のなかに見え隠れする妖精たちが奇妙なリアリティを感じさせる。同じころ、二人の少女が妖精のイラストを本物と偽って写真に撮って世間を騒がせた「コティングリー妖精事件」が起こり、大勢の人がだまされた。この絵の作者シムズの心中にも妖精という不可思議な存在を信じたい気持ちがあったのだろうか。



チャールズ・シムズ《そして妖精たちは服を持って逃げた》

1918-19 年頃 油彩・カンヴァス リーズ美術館

©Leeds Museums and Galleries(Leeds Art Gallery)

4. 現実

人間が生きる現実には、様々な恐怖と苦悩に満ち満ちている。なかでも最大にして最も普遍的な恐怖は死である。死は、犯罪や戦争とともに、画家たちにとって重要な主題であった。また、現実の世界には、死以外にも様々な不条理が潜んでいる。本章では死の場面を中心に、現実の中に存在するいくつもの闇を描いた絵画に焦点を当てる。

《ビール街とジン横丁》

安酒ジンを飲んで死に至る悲惨な生活を送る人々が描かれている。ここにあるのは、「死」の匂いだ。埋葬の情景や首吊り人が画面奥に見え、前景で階段に座る男の顔にも明らかに死相が漂っている。泥酔して子供を放り出してしまう母親の脚は腫れ物だらけで、よほど健康を害しているようだ。一方、質屋は繁盛しているのか貴族のような主人が、飲み代を得ようとして商売道具や鍋釜まで持ち込む客と何やら話している。当時、ビールに高い税金がかけられ、蒸留酒であるジンにはそれがなく安かったため、貧乏人はジンを飲むしかなかった。しかもアルコール度数が高いのですぐに酔える。生活のウサを晴らすという以上に、酔いに逃避する習慣が行きつく先を示して不気味な作品である。



ウィリアム・ホガース『ビール街とジン横丁』より

《ジン横丁》 1750-51 年 エッチング、エング

レーヴィング・紙 郡山市立美術館

©Koriyama City Museum of Art

6. 崇高の風景

18世紀から19世紀にかけてのロマン主義時代、風景画は新たな展開を遂げた。歴史画の背景として発達した理想的風景や特定の場所のありのままの姿を描写する地誌的風景に加え、なんらかの感情や気分を暗示的に表現する主情的・主観的な風景画が生み出されたのである。本章では、特に「崇高」の美学を反映した作例を取り上げ、背後に隠された不安や恐怖の感情を読む。

《ドルバダーン城》

ドルバダーン城は、ウェールズ北西部の古城。この近くのスノードン山界隈は荒々しい景観によって知られ、18世紀英国の画家たちにとって、絵になる景色を探す旅の格好の目的地となっていた。ターナーも、荒涼たる眺めに魅せられていくつかのスケッチを残した。その結実である本作は、ごつごつとした陰鬱な山、湧き上がる不穏な雲、陽光を背に寂寞とした姿を浮かべる城の廃墟を描いている。この絵が描かれる遙か500年以上前、中世ウェールズの王族オワイン＝ゴッホ＝アプ＝グリフィズは、弟との権力争いに敗れて1255年から1277年までこの城に幽閉されたという。前景に小さく描かれた人物は、もしかしたら牢獄へと引き立てられるオワインかもしれない。



ジョセフ・マロード・ウィリアム・ターナー

《ドルバダーン城》1800年 油彩・カンヴァス

ロイヤル・アカデミー

©Royal Academy of Arts, London;

Photographer: Prudence Cuming Associates Limited

6. 歴史

人間の歴史とは、激しい権力闘争の歴史でもある。ヨーロッパにおいてもそれは例外ではなく一度は栄華を誇った王侯貴族であっても、ひとたび争いに敗れてしまえば無残な末路が待ち受けていた。本章では、ドラローシュの《レディ・ジェーン・グレイの処刑》を中心に、歴史を彩る悲劇的なエピソードや運命に翻弄された人々の姿を描いた作品を特集する。

《レディ・ジェーン・グレイの処刑》

1553年7月にエドワード6世が亡くなると、時の権力者ノーサンバランド公は、自分の息子と結婚させていたヘンリー7世の曾孫ジェーン・グレイを女王に担ぎ出した。王位継承最有力候補はヘンリー8世の娘メアリーだったが、厳格なカトリック信者の彼女が王になることをノーサンバランド公は恐れたのだった。しかしジェーンは在位わずか9日でメアリー支持勢力によって王座を追われ、1554年2月に夫とともにロンドン塔で処刑された。イングランド一の才女とも謳われた才色兼備のジェーンは、16歳であった。19世紀前半にフランスで活躍した画家ドラローシュによる本作は、この史実に基づく場面を現場で見ているかのように緻密に描いたが、実際には処刑は戸外で行われ、服装も時代が違うという指摘がある。若く美しい女性の悲劇を演劇的な場面として描いた作品である。



ポール・ドラローシュ《レディ・ジェーン・グレイの処刑》1833年 油彩・カンヴァス ロンドン・ナショナル・ギャラリー

Paul Delaroche, The Execution of Lady Jane Grey, © The National Gallery, London.

Bequeathed by the Second Lord Cheylesmore,

1902

○関連イベント

○記念講演会 「怖い絵」の世界へようこそ

講師：中野京子氏（本展特別監修者、作家、ドイツ文学者）

日時：8月20日（日）午後2時～（約90分）

会場：ミュージアムホール（定員250名）

聴講無料（要観覧券、当日午前11時からホワイエで整理券配布）

○学芸員による解説会

日時：8月5日（土）、9月2日（土）、9月16日（土）

各日午後4時～（約45分）

会場：レクチャールーム（定員100名）

聴講無料

○こどものイベント「もっと怖い絵」をかこう！

日時：8月26日（土）午前10時15分～／午後2時～（各回2時間15分）

会場：レクチャールーム（定員30名）

参加費：200円（要事前申込）

※申込受付は7月26日よりこどものイベント係（TEL:078-262-0908）まで。

○ミュージアム・ボランティアによる解説

日時：会期中毎週日曜日 午前11時～（約15分）

会場：レクチャールーム（定員100名）

聴講無料

○お問い合わせ先

兵庫県立美術館

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

代表 TEL: 078-262-0901 FAX: 078-262-0903